

イネ病原菌源検出 免疫誘導を解明

近畿大など



【東大阪】近畿大学の吉久采花博士後期課程1年、吉村智美研究員、川崎努教授らは岩手県北上市の岩手大学工学研究センタ

（岩手県北上市）、京都大学と共同でイネの病害の元となるたんぱく質を検出し、免疫反応を誘導する仕組みを突きとめた。病気に

持続的な食料生産に向けてイネなどの耐病性技術の開発が欠かせない（イメージ）近畿大提供

強い植物の開発につながると見込まれる。

研究チームがイネの病原菌を認識するセンサーの役目を果たす受容体「Xa1」などの相互作用を解析したところ、Xa1が病原性因子を検出し、免疫反応を活性化することを見いだした。Xa1の機能の活用でイネの病害克服が期待される。

農業生産では病害による収量の損失は約15%、10億人分の食料に相当するとみられる。

近年では世界規模での環境変動や国際貿易に伴う病原菌・害虫の移動で従来の病害発生地域とは異なる地域での病害も発生する。持続的な食料生産の安定化に向けては耐病性技術の開発が欠かせない。

成果は国際学術誌「ニュー・フィトロジスト」に掲載された。